子供から大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を　1994年7月1日発行　[隔月発行]

文化高知

'94年7月 NO.60

「空ノ人」　山中雅史

(財)高知市文化振興事業団

光の楽しさ

宮地　彌典

公立中学生のとき、先生に誘っていただいて私は放送部に籍を置いていた。この学校では、毎年秋の一日をさいて芸能発表会を高知市立中央公民館で催していた。昭和三十年代のことなので、中央公民館が高知公園内に木造で建っていた頃である。

発表会の日に向けて、生徒はクラスごとに歌や踊り、芝居などの練習を重ねるのだが、いま思い返してもそれはなかなかの熱の入れようであったし、発表会当日の出来ばえも十分に見ごたえのある立派なものだった。

その分、私たち放送部員の仕事も大変なもので、発表に使う音楽や効果音を打ち合わせてテープに編集し、タイミング良く流す役目は発表会の成功の鍵をにぎっていると言っても過言ではなかった。

三年生になると、客席の中央に放送部担当の先生と一緒に陣取って、自分たちで作ったインターフォンを駆使し、進行・音響・照明の指示を出すという重責が与えられた。

この時、私は初めての体験に体を震わせていた。照明である。

舞台は光の当て方によって、さわやかな朝になるし、夕焼け空にすることも、月夜の明かりにすることもできるのである。ピンスポットを使えば、場内の視線は一カ所に集中する……光って面白いなあ!!

こども心は感動の極致に達し、高鳴る鼓動は大きく体をゆすっていた。

このとき以来、光への関心は高まるばかりで、高知工業高校の電気科三年生で初めて照明を学問として教えていただき、大学四年生の一年間は照明の卒論に没頭していた。

光について語るには、いくつかの要素がある。明るさ、色、輝き、影、心理的影響など。

例えば、人間が経験している明るさについて言えば、最高値は真夏の晴天日の正午の太陽が直射している面で約十五万ルックスある。低い方では、満月の下で〇・二ルックス。私たち人間の眼は、どちらでも新聞を読めるから高性能だと思う。もちろん、かなり眩しく、そして暗く感じるが読めることには違いない。

つづいて色について語ると、「光に色があるのですか、透明かと思っていたのに……」とよく言われるが、人間の眼は五五〇ナノメートルの波長の光を最も良好に感知する。この光は黄緑色なのだが、感度のピークがここにある。

これより波長が短くなると、緑・青・紫と色が変わっていって、さらに短いのは紫外線といって人の眼には感度ゼロ、つまり見えなくなる。反対に波長が長くなると黄・橙・赤と変わってその次は赤外線になって見えなくなる。

このように人間は光に長い間かかわってきたから、人が生活する居宅にも光と共生しようとする工夫を随所に見ることができる。

高知の住居は、高温多湿な夏の気候から人間の生活を守るように建てられている。昔の家はみな高床式で一メートルぐらい上げてあったし、家の周りに日陰を確保するために長めの庇（ひさし）を巡らしてあった。

昼間は有益なこの庇も、夜は嫌われていたらしい。月の光が家の奥までサーッと差し込んで欲しいところを長い庇が邪魔をするからである。

そこで人の知恵は前庭に白い砂を敷いて月の光を反射させ、家の中へ取り込むことを考えついた。竜安寺の石庭がそれであり、もっと大掛かりなのが銀閣寺にある。

ここには、砂庭の中にさらに純白の砂で作った直径五メートル、高さ二メートルほどもある円すい台形の「向月台」があり、月の光を少しでも多く召し込みたいと願う人の心が建てさせた反射塔なのである。

こうしたことから漢字が生まれたのであろうか。照明の〝照〟は、日を召す心と書いてあるし、〝明〟は日と月である。

光って面白いなあ!! といつになっても思うのは私だけではないだろう。

（ラ・ヴィータ　宮地電機社長）

京都にて　想う高知

山中　美和

住んでいるのは中心街から南に外れた下町の伏見区だが、そこに腰を落ちつけてはや十三年になる。学生時代も含めると、生きてきた人生の半分近くは、この街に住んだことになり、京都の生活にも大分馴染んできた。

そんなあるとき、近所の小さなスーパーで、

「どうしたことぞ、この魚は！　目があっちむいちゅうぞ」

という怒ったような声を聞いたときは、ほんとうにびっくりした。

こんなところで高知弁が聞けるとは、「ふるさとの訛（なまり）なつかし停車場の人ごみの中にそを聴きにゆく」という啄木の歌ではないが、懐かしさのあまり声をかけたいと思いながら、それも出来ず、私はそのあとしばらくおじさんの周りをうろうろしながら、土佐訛を楽しませてもらった。

京都で「高知出身」と言うと、決まって「それはそれは、お酒が強いでしょう。どれほど飲まれますか？」と聞かれる。高知の酒好きがよほど有名なのか、他県の高知出身者がうわばみなのか、そのへんのことはよく分からないが、この判で押したような応対には少々うんざりさせられる。残念ながら私は、あまり飲めないので、高知のイメージを壊しているかもと、ちょっと弱気になったりする。

箸拳のルールについて聞かれることもある。子どもの頃、宴会で父や知り合いのオンチャン達がやっていたのは覚えているが、ルールは知らないので答えようがない。聞けば高知では毎年箸拳大会が開かれているとのこと、いろいろな伝統が時代とともに失われていくなかで、こうしたことが大切にされるのはいいことだと思う。

その次に言われるのは、「はりまや橋」と「桂浜」である。はりまや橋は、がっかり橋の日本三名橋（？）の一つとして、地元でもいろいろな改造方法が研究されているようだが、あの朱色の欄干には失望だという。もっと大きな川と大きな橋を想像していたという人も随分いる。

桂浜は概ね好評ですばらしいというのだが、箱庭のような小ささはどうしようもないことだろう。眼前にひろがる太平洋を、坂本龍馬とともに眺めていると、明日への希望とグローバルな視点に胸を張ることができるのである。

他によく話題になるのは、いま書いた坂本龍馬をはじめ維新から明治にかけて活躍した人物の話や、鰹のタタキ、さわち料理、四万十川、闘犬のことなどで、最近では鯨見物のこともよく尋ねられる。

また結構有名なのが離婚率の高さである。男が強くてイゴッソウなのか、女がかかあ天下でハチキンなのかと囁かれつつも、実は豪気で自由で、新しいものをどんどんとり入れる気質なのだろうと納得されているようだ。黒潮や照りつける太陽、波が岩に砕け散るイメージが、開放的な県民像として描かれているのだろうか。ヒッチハイクやバイクで高知を訪れた友人達や、旅行で高知の人達と交流した方々が、「高知の人はものすごく親切で素朴でいい人ばかりだった」と口を揃えていうのも、こうした風土と無関係ではないだろう。滔々とした黒潮の流れとともに、人情味のある誠実な温かさ、人のよさが、訪れる人々の心をとらえているのだと思う。

こうして考えると、高知は随分話題が豊富で存在感があるのだと思いながらも、「高知は四国のどっち側ですか？」「金比羅さんや道後も、高知にあるの？」などと言われると、少なからず寂しくなってしまう。

さて、私自身に話を戻させてもらって、私のなかに常に「高知」があるというのではないし、私が京都で高知を語る時は、いつも誇りと懐かしさとともに、高知を離れていることに対する申し訳なさのようなものがある。高知の自然を守り、文化や教育、あるいは経済を支えているのは、高知に住んでいる人達なのに、私はそのためになにをしたというのだろうか。私に高知を自慢する資格があるのかと。

さる五月「市民フロア」で個展を開かせていただいた時も、県外の者が高知で個展をするような不安があった。だがその不安は初日に吹っ飛んでしまった。そんなことには全く囚われない高知の方々に接して、ほんとうにうれしかった。あらためて高知のおおらかさとあたたかさを感じさせられたことだった。

（画　家）

文化行政考

市川　和男

「文化行政」という言葉が、いま何げなく使われているが、その実体はなかなか見えて来ない。

そもそも文化行政自体、異なる概念の単なる結び付けではないのか、という疑問が起こる。

その原点において「文化」とは「個」なる営みであり、「行政」とは「共」なるものである。また、文化は行政を包含し得ても、行政は文化を包含し得ない。行政はあくまで文化の一分野だからである。しかも行政は文化を統治してはならない。

だとすれば行政の一形態としての「文化行政」ということは、本来的に自己矛盾を孕んでいるのではないのか。もっとあからさまに言えば、「行政の文化化」とは行政の非文化性から脱皮することであり、文化行政とは反文化的要素をもつ行政からの離脱を意味するものなのかも知れない。

顧みると明治は「文明開化」で幕を開けたが、政治や行政に「文化」という言葉が表舞台に登場したのはやはり戦後の「文化国家の建設」からであろうか。以来、文化生活、文化住宅、文化釜、文化鍋の類まで疑似文化が雨後の筍のように生まれた。

平成に入るころから、いたるところで文化センター、文化の里、国際文化村など、いずれも文化という言葉が冠せられ、それに補助金が投下されている。戦後と平成で若干違うのはフィジカルなものから、それがメタ・フィジカルなものまで含むようになったことぐらいであろう。

その間、高度経済成長のための農山漁村の疲弊と都市の異常膨張の時代は、減速経済の始まりから終焉を迎えたが、農山漁村の深刻さには、さらに拍車がかかったままであり、その出口は見つかっていない。

そして次第に平成不況の深淵に落ち込んだ産業社会全体も、これまでにない暗雲のなかで質的変革を迫られている。さらに国際的にも「不確実性の時代」となり、不透明感が世界を覆っている。

こんな過程で行政からは「地方の時代」という掛け声がかかった。続いて「こころの時代」「文化の時代」と耳ざわりの良いポスター的行政用語がまるで現実に背を向けるかのようにまき散らされた。

そんななかで、太陽のもとで働く若者は次々と姿を消していった。そして屋根の下のネクタイ族が増え続ける。高知県も人口減少の典型県としてそこから脱し切れないでいる。

県は昨年「文化を語り合う会」を各地で開催し、私もたまたまその会に出席した。その折、「文化が過疎の歯止めにならないだろうか」という主旨の問いかけがあったことを覚えている。今それらに基づき「高知県文化振興ビジョン」の策定が進んでいることと思うが、それに期待する気持ちと共に一抹の不安と危惧も禁じ得ない。それは進展する過疎への焦りから、行政の短絡的な文化への過剰期待を感ずるからである。

端的に言えば、過疎も過疎なりの文化が育つものなのである。文化とはもともとそんなものである。

文化財を発掘しあるいは育成し、保護し保全してゆく行政は勿論必要である。そして文化施設の整備やその担い手の養成、または、一般行政の手法にもう少し文化的感覚を取り入れることも重要である。しかし、文化行政とか行政の文化化という前に、真正面から行政自体を見直し、基本的に立て直す視点が欠落してはならない。でなければ砂上の楼閣である。

そもそも過疎とは産業構造上の問題である。その解決なくして解消は不可能である。その解決なくして解消は不可能である。そして文化人類学の範疇を見るまでもなく文化という総合的なカテゴリーのなかで、産業は重要ではあるが一部分であることも確かである。

さきに触れたように新憲法制定直後から「なんでも文化」という時代があったが、ここ数年前の「ふるさと創生」ブームのなかで、バブル経済に呼応するかのように「バブル文化」の時代がやって来た。観光と文化が同次元化され、リゾートばやりのもと、地域づくりをイベント演出と置き換えた市町村も全国的に続出したことは記憶に真新しい。

確かに地域づくりはひとつの文明現象ではある。しかし、いうまでもなく文明は時に文化を生むが、文明が即文化ではない。

ともあれ、地域の文化を考えるとき重要なのは「ケ（つまり気、エネルギー、生産、日常）」の営みである。「ケ」抜き「ハレ（晴、あらたまり、祭典、非日常）」はイベントではあり得ても文化ではない。「ケ―ケガレ（気枯れ、エントロピーの増大）―ハレ」という再生・循環の途切れた行事や営みは一過性の単発的な泡沫に過ぎない。

何れにしても文化そのものが、極めて総合的総体的な現象であり、また地域の文化とは、その地域固有の風土という非画一化の線上での自然との共生の次元に育つものである。

地域から生まれ、地域に根づいた本然の文化は置換できない。その視点が正確に定まっていなくては行政は文化たり得まい。

県はいま「木の文化」を提唱しているが、それも大変重要な行政テーマであろう。私はそれに「水・土の文化」を加えたい。

例えば、四万十川のコンクリート護岸。その反省から近自然工法が最近やっと少し見られる。だが植物護岸でない限りどこまでも疑似自然的景観が現出するに過ぎない。また、河川周辺に行政による観光・休養・保養などのコンクリート建造物が目立つ。これも流域の風土的景観とはなじまない異質の、異様な風景を露呈し、不協和音を醸し出す。

「日本のふるさと」としてのこの川を本当に思うなら、その清流のほとりには、やはり、木と土と石など自然素材を活用した建造物が、自然の摂理に適うものである。自然生態系の資源循環を保障し保育することのなかにこそ、豊かな植生と従って健全な美しい景観が創出されるのである。県の部局を超えた「四万十川環境保全対策推進計画」作成上ぜひ考慮されたいことのひとつである。

「真」の地域総合計画は、その地域の個性的な景観への美学が背景の思想として存在しての方法論でなければならない。

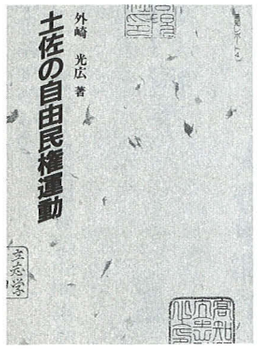
本県においては、自然を文化財もしくは近文化財と見る視座を先ず確立すること。そこから自然環境と自然と共生する民俗的行事や風習を次代へ贈る最大の文化だとするくらいの住民運動を行政が育ててこそ、文化行政といえるのではないだろうか。

「文化振興ビジョン」とは、百花繚乱のあだ花文化を羅列することでもなければ、一部局や一行政委員会で出来ることでもない。もっと基本的に言えば、従前の行政体質としての産業主義的予算構造の抜本的な改革なくして、文化行政を語ることはできまい。なかでも、過疎の市町村にしばしば見られる土建至上的予算編成の行政感覚では先ず不可能であろう。行政の文化化を考える際には、市町村の多くがこのような予算構造に至った経過の根底を見極めながら、今後の行政的回路を見いだす作業がおろそかにされてはなるまい。

その基底のところでの転換こそ最も大切な要点である。そうでなければ、相変わらず表層的な結果しか出ないし、いわゆる文化行政の居所はないであろう。

その上で、従来の効率至上主義行政から脱皮し、美学的感性による行政を可能にする道を探ることが、いま許されている範囲での文化行政のベクトルではないだろうか。

窪川町宮内「時空庵」



高知レポート４

第二刷発売中

土佐の自由民権運動

外崎光広 著　　Ａ５・172頁 定価1,000円(税込)

全国の自由民権運動における土佐の位置を正当に評価し、従来の土佐自由民権に対する誤解・偏見への反証を資料に基づき展開した問題提起の書で、土佐自由民権運動を考える上では欠かせぬもの。第二刷では「高知県永小作権ニ関スル請願書草按」「高知県永小作権請願ニ対スル参考書」を資料として新たに加えた。

橋の下の風景

福島　高明

夏の暑い日に、テレビなどで雪国の景色を見せられても、その美しさや、あの白のもつ神々しさは伝わってこない。雪国に建つ家々は冬の間は、神々に平伏すかのように肩（屋根）をすぼめ、それが春を待つ犠牲であるかのように、氷柱（つらら）を軒にかかえている。このような実感は凍りつくような厳しい自然の中に身を置かなければ、伝わってはこない。これを逆に言うなら、感受性を刺激するような景色でなければ風景とは言わず、それはただの景色ということになる。景色は良しあしには無関係であり、そういう意味では絵や写真によく似たところがある。つまり、風景＝良い景色ということである。

そうなると、与えて頂いている題は「私の好きな風景」ではあるが、好き嫌い以前に、良いか悪いかを検証しなければならず、責任重大である。ただ言えることは風景というと山水風物の趣を示すことが多いが、今、人々のくらしの様子を風景としてとらえることが自然や町（都市）を考える上で大切なことではないだろうか。また、対象が山や川であれ、町や建物であれ、景色として隔てて眺めるのではなく、その中に少し浸ってみることも必要である。そうすることによって、その中で人がどのように生活しているのか、またどう生活すべきなのかが見えてくる。

私の師である建築家出江寛先生が「現代都市は絵にならない」と言われたが、私も同感である。しかし、今、人々の様々な自然とのかかわり合いや、都市の中でのくらし方が風景として残っているし、これからでも身近に創造でき得ることである。また、そうする過程で、その中からも新しい文化や美意識は育まれてくるだろう。

「現代都市は絵（景色）ではない」とした上で、今は都市でのくらしや美を創造するときではないのか……などと考えながら鏡川のボートの上で二歳になる長男を後ろに乗せ、オールを漕いでいる。私は鏡川でボートに乗るのが好きである。

ボートに乗ると橋の高さから見るのと違って、堤と堤の間が自分の空間になる。それがストレートに見渡せることで、より大きく膨らむ。そしてオールの水を掻く音が何回か耳に入ってくると、不思議と車の喧噪は耳に入ってこなくなる。ぼーっとできる空間である。そして、その中を目的もなく漂っていると水草が目に入ってくる。堤の上から見ると雑草で、価値のないものに思えたあの水草が、瑞々しく生き生きとしている。その近くでは蜆（しじみ）取りをする人達がいる。それは仕事をしているという風に映らず、正に自然であり風景である。そこから下って、潮江橋の下に来る。その薄暗さの中で長男が目を見張っている。

いつもは何気なく渡っている橋だが、初めて身近に見るコンクリート製の橋桁に、私も子供の時に感じたことのある、強さや親しさを同感しているのだろう。そして、「パパと一緒に造りたい」と言った。

風景とはこうありたい。

（ＴＨＩＮＫ建築設計事務所）

五台山の四季

大野伊都子

「ゴーン」「ゴーン」と心地よいお寺の鐘の音が私に朝を知らせてくれる午前六時、寝床より離れがたく朝のまどろみ、部屋には外の薄明かりがさし込む頃、鐘の音は五台山のふもとに住む私たちに、やさしく朝のあいさつを送ってくれます。（雨期には谷川の流れ落ちる音、また初夏にはすずめのさえずりで鐘の音が消されることもありますが……）

まだ少々眠気を残しながら北を見ると、朝靄に濡れた山の緑が鮮やかで、その山肌を縫うように、星神社へと続く急斜面の石段は白く輝き、そして山頂にどっしりと腰を据えて、天を突き刺すごとく聳える真紅の五重の塔が朝の光を浴びて素晴らしいコントラストを醸し出し、朝のひととき私の心を和ませてくれ、また今日も頑張れと奮い立たせてくれるのです。

南を見ると、下田川が目前に流れ、その向こう孕の山肌まで緑の田園地帯が広がり、やがて稲が実る頃になると朝の爽やかな風を受け穂先が波打つ様は、あたかもメロディーを奏でるごとく私の心に響いてきます。

通勤する護国神社沿いには、春の訪れを告げる桜便りを聞く頃、桜並木の蕾がふくらんだと思ったら、あっという間に満開とになり、毎日慌しく過ごし、桜見物に行くこともない私には短い期間だが楽しませてくれるのです。私の一番好きなのは、桜が吹雪となって散りゆくとき、（特に雨にうたれて、ハラハラと散る）桜の花びらが車窓に舞い落ち、くっついたりすると娘心のように、ロマンチックな気分になってしまい、ついひとり微笑んでしまいます。

夏の浦戸湾では、投網でチヌやニロギの漁に興じる人や、橋の袂で釣りを楽しむ人達。

秋の紅葉はまた素晴らしく、帰途青柳橋にかかると、五台山の山の紅く色づく様と、浦戸湾に写し出された風景とが目にとび込んで来るとき、思わず〝ワッ〟と声を発しそうになり一日の仕事の疲れをいやしてくれるのです。

寒い冬の朝、川面より湯気が立ちのぼる中で鴨が群れ遊んでいる光景は心温まる思いがします。四季の移り変わりを満喫できるそんな五台山が大好きです。

今は亡き坂本昭前市長も、五台山の緑は素晴らしい、都市近郷の田園として守ってゆかなければならない。開発は絶対させない。この自然を守り残すことが私の使命だ、と力強く言われました。

しかし、高知市内も開発が進み、都市化され緑を失っている中で、五台山の田園地帯も、高知新港の建設に伴い産業道路が通り、孕にかけての田園地帯は、流通センターの基地となるようです。平成十一年には私の大好きなこの緑、この田園風景も姿を変えるということですが、こんな大切な自然を失い、守られないことがとても悲しく思われます。

（高知競輪競馬労働組合）

望六峠周辺

岡林　京子

〝立ち直れそうな峠の風に合い〟

これは望六峠のファンになって、そんな中からこの一句が出来ました。

もうだいぶ前になりますが、七ッ渕へ行った時のことです。柿の実がきれいに色づき、田んぼで一人の農婦がラジオを聞きながら作業をしていた風景が心に残っています。

確か北秦泉寺の金谷川橋を渡って川に沿い、車一台がやっと通れる程の道でした。

カーブには必ず〝七ッ渕〟と矢印があって、このままどんどん登っていけばやがて必ず七ッ渕に着くと思い安心していました。山の麓に突き当たると、自転車を置いて歩き始めました。

かなり急坂ですが、広くて危険は全くなく、普通に歩いて一時間少々で望六峠の茶屋に着きました。七ッ渕へ行くのにちょうど中間地点の休憩所、誰もが必ず足を止める所です。ここまでの山道は、木漏れ日を受けて土の温かみの染みる道中で、とても気に入ってしまいました。そしてそのお茶屋さんはふる里の香りがいっぱい漂い、市街地では味わえないくつろぎがあるスポットでした。

ここにはすべて手づくりの日本そばやおすし、草もちやおでんなどいろいろあり、そして人情味たっぷりで人良しのおばあちゃんもいます。店の外にはゴザも用意されていて、市内を一望しながらの昼食が取れ気分最高となります。その上望六峠が好きでたまらない仲間に出会えます。そこから目的の七ッ渕へ出発、高知市内にこんなに素朴で体にやさしい山道があるとは驚きでした。

坂はあまりきつくありませんが、歩くこと一時間半位で七ッ渕へやっと到着します。

そこには立派な神社があって歴史や渕のいわれを詳しく書いた立札もあります。夏にはこれ以上の場所は、地上で求め得ないという程の別天地です。秋口にはひぐらしが鳴いていて「カナカナ、カナカナ」の鳴き声と共に山を下ってきます。四季を通じて味わい深いこの山道は、体力的にも時間的にもぴったり、私にとっては最高の場所です。また、北山スカイラインのコースで車でも行けます。

登り口もいろいろあると思います。時には望六峠までにして、休日の昼食を楽しみます。私には喫茶店で座っておしゃべりをするよりは、ずっと健康によく、一石二鳥といえます。バタバタの暮らしの中へ今ではすっかりこの望六峠が溶け込んでいます。

明日への活力をもらっているのです。ストレスが溜ると友達と「行こうか」というのはこの望六峠への合言葉なんです。

気楽に手軽に出かけられるのも魅力の一つです。山の楽しさを十分に満喫させてくれます。是非、出かけてみませんか。

（朝倉川柳会）

高知県の文化財(三)

土佐の神楽

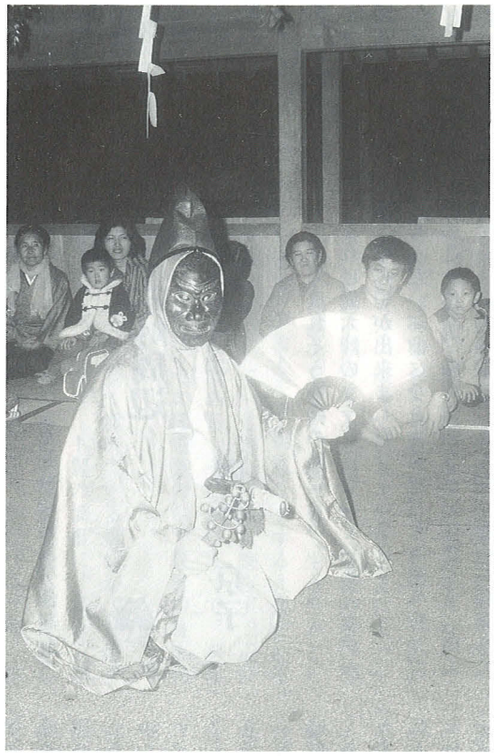
高木　啓夫

昭和五十四年十二月七日、文化庁の文化財保護審議会は高知県の九つの保存団体の伝承している神楽を、一括して「土佐の神楽」として国の重要無形民俗文化財に指定するよう文部大臣に答申した。この答申をうけて正式に指定されたのは昭和五十五年一月二十八日であった。この九つの保存団体とは、

香美郡物部村　いざなぎ流御祈禱保存会
長岡郡大豊町　岩原・永渕神楽保存会
土佐郡本川村　本川神楽保存会
吾川郡池川町　安居神楽保存会
吾川郡池川町　池川神楽保存会
吾川郡吾川村　名野川岩戸神楽保存会
高岡郡梼原町　津野山神楽保存会
高岡郡東津野村　津野山神楽保存会
幡多郡十和村　幡多神楽保存会

であった。

この指定をうけて九つの保存会は「神楽の保存振興を図り、かつ後継者の養成を図ることを目的」として昭和五十五年二月二十二日に「土佐の神楽保存会」を発足させた。同じ二月十九日から十日間、土佐民俗学会主催「土佐の神楽展」が高知市民図書館展示室で開催され、土佐の神楽は県内外にひろく知られることとなった。



本川神楽

国の重要無形民俗文化財に指定されるまで県指定無形民俗文化財に指定されていたのは本川神楽、池川神楽、津野山神楽のわずか三つの神楽にすぎなかった。知られざる神楽が四国山地の山里深くひっそりと舞い続けられていたのであるが、その由来の明白なのは十和村の幡多神楽である。その「大神楽歌掛合伝記」に、「猥りにこの書読むべからず、尤も当家になくして望み候所、早速に譲り申さず、右に付又亦是非望み度く存じ立ち、自身に彼の郷へ両度行き、高岡郡津野山郷梼原掛橋出羽正宅へ罷り越し、彼れ是れ所望致し、尤も右神楽仕業は漸く二日滞留にて幣神楽、二天之神楽右二品習い、夫れより神楽彼れ是れ引き出し」「神楽道具面杯自己に拵へ、時に年号は安政元寅年閏七月中旬従り右稽古相始め同年九月廿八日右神楽本式執行」と記されている。梼原の津野山神楽の伝授を請い、安政元年初演、今から百四十年前のことであった。掛橋出羽正が秘伝であるが故に、囲炉裏の灰に文字を書いては消し、書いては消しして伝授したと語り伝えているのはこの時のことである。

この幡多神楽は十和村の神職平野清記が自分の土地にも神楽舞があればという希求をその契機としているが、民俗芸能が各地へと伝播してゆく一つの形を示した実例である。

石鎚山麓の本川神楽はこれまで高橋掃部頭なる者が九州日向に赴き伝授され、中野川集落にある桟敷岩で舞うたのに始まるとされていた。しかし、数年来解読を続けてきた地元資料からは伊勢国を出自とする高橋四郎左衛門盛正なる者が、大永三年(一五二三)ごろ本川村に落ち着き、携えてきた神楽舞を奉納したことを始まりとすることが明らかになった。この場合は神楽舞を家伝としている高橋家が、本川村に定着することによって伝承されてきた例である。

池川町の安居神楽は吾北村の岡林家から伝授されたと伝えているが、その吾北村には神楽の面影は全く消え果ててしまっている。いずれにせよ、土佐の神楽がどのようにして演じ始められたろうとの想いは限りない夢の世界へと誘う。

九つの神楽はそれぞれに異なった情感を漂わせながら舞い続けられている。それは楽器、衣装、神楽歌、演目の名称、舞台飾り、採物(手に持つもの)、舞所作、そして仮面の表情などの相乗的な結果としてのものである。また多くは昼神楽であるが、夜神楽である本川神楽には特別な情感を湧出させる。

土佐の神楽の演ずる演目は数十種に及ぶ。概して言えば榊や幣を採物とする素面舞(面をつけない)は序の部分に多く、悪魔払い系のものは太刀、弓、長刀などを採物とするがこれには仮面を着ける舞と、そうでない舞とがある。三つは盆、長刀、弓などを採物としてアクロバット的演技をみせるものがある。しかし、これら諸演目のなかで、最も信仰的にも演技上からも荘重さをみせるのは四天の舞であり、五人五郎の舞とも称する。それはその土地の邪気邪神悪霊を鎮めて、村里の平和と豊年の祈りを込めているからである。

安居神楽

民俗芸能といわず民俗というものは単一性のものではないので、必然的に多様化多面性を有してくるものであるが、土佐の花取踊りもさりながら、土佐の神楽ほど県下に神秘に富んだ多彩な無形民俗文化財はほかにあるまい。

この単一性でないということは、常に変化変容をもたらしつつあるということでもある。朽ちた仏像は近年の驚異的な修復技術をもって保存に耐えうるが、神楽伝承は如何に立派な神楽殿を建立しても、修復の技術は伝承者の精神的持続の保存である。いかにこの精神的持続を若者に誘発させ、持続させるかが無形民俗文化財に与えられた課題である。

(県文化財保護審議会委員)

高知のエスプリ　好評発売中!

—ふるさとの未来(あす)を考える—

A5判・160頁・定価1,200円(税込)

「文化高知」の創刊号から50号までの巻頭頁をまとめた書。こうして一書にまとめると、それぞれの文章が機関誌掲載時とはちがった感動をよぶとともに、底流にあって響きあうものが、重い説得力となっていることを教えられる。

流路訪作(四)

小茄子の溯上

山岡　浩

お彼岸の季、潮風が札所参りの鈴の音を運ぶ。

真竹の枝に這う豌豆の蔓、舞う花に若莢摘みて浜の春は早い。

十市の里、砂丘帯突出の小山在りて峰山。頂上は三十二番札所禅師峰寺の霊場。小高き峰山ながら、御堂前に立てば、眼下際立ち聳え浩然たる大洋を望む。黄砂の彼方を推望しつつ、桂浜の巌頭から手結岬を結ぶ曲線、その築堤沿いに土佐の誇る砂丘園芸のビニールハウス群帯が続く。

ここ十市の里は、三里に接し海沿いて東西四キロ、南北三キロ、北部大森山の南麓から海辺砂丘に至る。山麓一帯は、ヤマモモなど暖地性果樹数々の特産地。海辺砂丘は促成野菜の伝統産地、ことに十市茄子の老舗。

享和二年（一八〇二）藩御座船和歌山熊野浦にて、水師甚内が茄子種を授かり種崎に作りたるを伝える。

三里の地に興る胡瓜・茄子、その隣り合わす十市の里は、徹して作る気風に溢れ、作風砂丘に凝り、野菜促成園芸の髄を極める。

なかでも十市の園芸家山本浅吉さんによる技法創造は、促成野菜園芸発達史に燦然と輝く。

彼岸の露地播き慣行から、温床障子の片屋根・両屋根・暖房への道が拓かれて行く。

明治三十五年胡瓜、大正八年茄子の一月播種、昭和三年に十月播き・二月植え・四月下旬採りに成功。七年ドラム缶暖房を編み出し、油障子の薪加温促成栽培体系を構築。十年に地茄子から十市茄子を生む。

昭和十年代の温床は、両屋根の油障子（三尺×六尺）。側面三尺の高さに油紙を張り、棟六尺・間口一丈。油障子は七～十日間隔に張り替えとし、それに夜間の弧掛けがあった。

薪の温湯加温は、ボイラーを一段低く据え付けての自然循環。薪一焚きは三時間、それに単棟ボイラーを数棟管理した。仮眠小屋に泊まり、家族交替の夜通しで、日中は弧掛け・肥培管理・収穫・出荷など、休む暇無き忙しさであった。

戦前に至る時期、近傍砂丘一帯、茄子など加温油障子の全盛期。

戦後二十二年、逸速く十市加温小茄子が復活。二十六年新被覆材ビニールを油障子枠に張りて、ビニールハウス時代の幕開けとなった。

爺さんがよく「砂地の作り一反は田処の一町に及ぶからのう」と口癖の語りがあったと言う。砂丘畑は、戸当たり六〇〇～七〇〇坪規模にして、小よく大を得る伝統集約栽培産地。

昭和三十五年頃からのピーマン作を経てシシトウ・小茄子それに生姜

高知市文化振興事業団編
高知のエスプリ
A5判・一六〇頁　定価一、二〇〇円

高知県緑の環境会議編〈高知レポート7〉
森林と林業の再生
A5判・一五二頁　定価一、〇〇〇円

山本　大著
幕末の青春―坂本龍馬の生涯―
四六判・一六八頁　定価一、二〇〇円

依光　裕編著
珍聞土佐物語 上・下巻
四六判・三九二頁・四〇八頁　定価一、六〇〇円

鈴木文熹・井本正人・関根猪一郎著〈高知レポート6〉
協同組合と地域づくり
A5判・一三六頁　定価一、〇〇〇円

清遠幸男著〈高知レポート5〉
高知県の工業
A5判・一一二頁　定価一、〇〇〇円

外崎光広著
土佐自由民権運動史
A5判・四一四頁　定価二、八〇〇円

外崎光広編
土佐自由民権資料集
A5判・三四四頁　定価三、〇九〇円

土居重俊監修
高知市文化振興事業団編
土佐弁　土佐日記
B6判・一三〇頁　定価一、〇〇〇円

岡林清水著
高知県文学散歩
四六判・二七八頁　定価一、八〇〇円

高知の文化を考える会編
高知の文化を考える
A5判・一八八頁　定価一、二〇〇円

高知市文化振興事業団編
わがまち百景
A5変・二二四頁　定価一、二〇〇円

筒井広道著
画帳の歳月
A5変・二五六頁　定価二、〇〇〇円

土居重俊・浜田数義編
高知県方言辞典
A5判・七三六頁　定価六、一八〇円

高木啓夫著
土佐の芸能
B5変・三四六頁　定価四、九四四円

・米茄子の年一作型産地となる。

地場品種「十市茄子」をもって、伝統の小茄子栽培を今に存続。ヘタ抜き・果皮・味質と崩れない煮姿が持ち味で、高級料理用に特需がある。

小茄子作りは、開花十五～二十一日（普通三十日）の若採りで、一果三〇グラムにして一口茄子とも呼ぶ。

その栽培適温は、日中セ氏二七～二八度、夜間セ氏一八度で、七月に播種、二カ月の接木苗定植。仕立に特異な管理を要し、草勢抑制の吊糸操作と、極端な摘葉で存分の陽光照射を図る。

主枝四本の仕立は、発生する側枝三～四葉部位着花を一葉置いて摘心。収穫後の切り戻しを繰り返しながら結果枝を育て、十～六月までの収穫となる。

茄子の県産額は全野菜の二一％、その主座にあって普通茄子が主体。

安芸郡市の一作型・春野の後作型で広域主産地をなし、茄子類の荷揃えに小茄子在りて土佐ものが冴える。

さて熱砂に育つ小茄子・シシトウ・米茄子が、流域横断的に四万十川を溯上。これが夏場の冷涼な風土に馴染み、地域興しの主役となる。

四万十川は、東津野村不入山を源に津野山・高南台地・北幡・中村へと延々一九六キロの流路。

清流四万十川。いま天下に銘河の誉れ高く、天然の風格が賞賛される。そこに往年の文化籠もり流路の泉源をなす。

延喜十三年（九一三）津野山郷に拠りし津野家は、慶長五年（一六〇〇）に至る六八七年間、土佐国府の治世、京に結ぶ源流域の繁栄が津野山文化となりて今に生きる。

津野山郷は、四国カルストの高原状台地にて、川床沿い段丘に平地分布多く、山岳域ながら豊富な農耕基盤ありて、焼畑農法と棚田開発が豊穣を生み、津野山文化を支えた。

米・麦・雑穀・芋類・茶・蒟蒻（こんにゃく）・椎茸・楮・三椏・繭・木炭・土佐牛等、山場特産の宝庫を誇る。

この流域の広大な森林資源は、藩政期からの管流し・筏流しとなり、明治期からの木炭需増が、水運を利しての製炭産地となる。

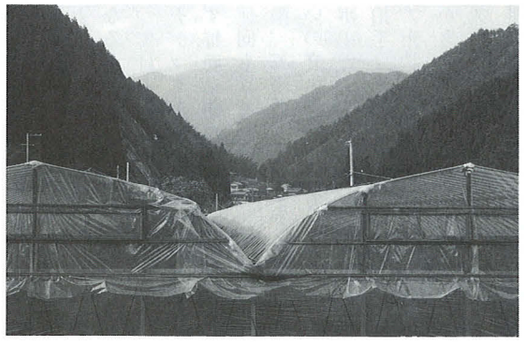
上手から七〇～八〇俵を積むセンビ、一二〇～一三〇俵を積むタカセ、さらにタカセの二～三隻分を積むセンバの三種の木炭船が西土佐・川崎を中継点に運行した。

河口下田港に運ぶセンバ。帰路は込風に帆を揚げての溯上であった。

だが、下流域の広野は常習水害に荒れ、「天下の暴れ河」の異名そのままの苦難に満ちた経緯を辿るが、漸くにして治水万般整い沃土を成す。流域農業は、流路域の立地に照応、個性豊かな地域営農が育つ。

河口外苑域の大方・下流域の中村一帯の田処は、施設野菜・花卉産地を形成。米と椎茸の北幡は稲転契機に夏野菜等の産地となる。米と畜産の高南台地が生姜と韮産地に、上流域・津野山が夏野菜の里となる。

なかでも、山峡定着の園芸野菜は先人未踏の壮挙。雨除施設による夏場野菜産地の画期的創造に驚嘆する。



小茄子のハウス（津野山郷）

大河中流西土佐村の農業は、その山場にあって米・甘薯・木炭から椎茸・栗・繭の産地に進むが、四十六年からの米生産調整を深刻に受けとめ、水田転作目を厳選、その西瓜栽培の成果が、爾来野菜一筋の道となる。地域産額の六三％が園芸となり、夏場の雨除施設のシシトウ・米茄子・小茄子が主力品目で、さらに冬作型の施設苺・露地菜花を加え躍進する。

椿原町・東津野山に旦る津野山郷は、四万十川の源流域。中心地は四〇〇メートル処の標高にして米・土佐牛・茶・椎茸などの産地。伝統の産業悉く衰化その極に傷むも、雨除ハウスの夏場野菜栽培方式を六十年に成し遂げ、視界無き地域農業に転機到来、園芸農耕をもって地域農業の基幹とする。

この里の気温は、年平均セ氏一三・五度、高知に較べ三・三度低い。暖候期の両端その最高・最低気温は、五月がセ氏二二・三度と一一・一度十月セ氏二一・一度と九・六度にある。

この気象環境下に、小茄子など日中セ氏二七度～二八度、夜間一八度の基準適温を雨除ビニール施設に具現する。外注苗により四月下旬～十一月下旬に旦る栽培体系を築く。

古里・海岸砂丘から溯上の小茄子は、住み馴れし冬作そっくりの夏作をこの新天地に創る。

かくして土佐園芸の最も得意とする冬作型が、最も不得意としてきた夏作型に再現。周年出荷となり、下流が上流に結ぶ所産として尊い。

（元高知県農業協同組合中央会参事）

演奏会の楽しみ再発見 その①

宮田　信司

私は昨年文部省在外研究員としてウィーンに滞在した。ウィーンといえば音楽の都。さまざまな演奏会やオペラが毎晩のように開催されている。私も練習の傍らせっせと通った。演奏会というのは学生の頃より勉強の為に行くものだという認識があったが、今回ばかりは十分楽しませてもらった。そんな中で三十回以上は通ったオペラの話を少し記したい。

まずウィーン国立歌劇場。一八六九年、時のフランツ・ヨーゼフ皇帝の命により建てられたが一九四五年戦争で破壊され、その後一九五五年見事復興。その壮大な外観に感激し緊張気味に中央正面玄関から一歩足を踏みいれれば、そこでは既に今宵の物語の世界が始まっているかのようである。タキシードの男性にエスコートされたイブニングの女性達に混じり、優雅に場内を歩くとそれだけでもウィーンの社交界の雰囲気を十分味わえる。セーターやジーパンでは場違いの感がして居心地が悪い。おしゃれはここではもはや義務と考えた方がよさそうだ。「魔笛」や「くるみ割り人形」など子供も楽しめる演目の時には、小学生ですらきちんと蝶ネクタイでマナー良く聴いているのだから。

ウィーン国立歌劇場　１階平土間席より

オペラはよく総合芸術といわれるが、一部を除いて難しいものではない。ストーリーも結構下世話で非道徳的、色恋ざたも多くまた時には殺人も起きたりとまあサスペンス・スペクタクル・メロドラマといったところで、それに一流の舞台と音楽が付くわけだからおもしろくないはずがない。

座席の価格設定は五つのランクに分かれていて（約一万五千円から九百円まで）値段が高い座席ほど舞台がよく見える。上の階に上がるにつれ舞台から遠ざかるので値段も安くなるが音は良くなるので、我々にとってはそのあたりが狙い目である。チケットをとるためには労を惜しまず毎回早朝から一、二時間並んだ。何回も来ている通の人や学生達は四階、五階の後ろ、それも二百円くらいの立ち見席にいてそれがまたブラボーだのブーイングだのうるさい。拍手はいつでも思いきりできるが、ブラボーとかブーイングにはなかなか勇気がいる。かなり興奮した時にブラボーはつい出るが、大きな声で叫んでもホールが広いので自分の声だけが浮き上がって急に恥ずかしくなったりする。だから後ろからの方が無責任に（？）叫びやすいのだと思う。

観客の殆どは夫婦同伴かカップルである。仲良く老夫婦がオペラを楽しんでいるのを見ると、生活の余裕とゆとりを感じさせられる。幕間には豪勢な一団は恐ろしく高いシャンペンを惜しげもなく飲んでいるが、普通はグラスワインかコーヒー、小さなサンドイッチを飲食したりして過ごす。幕間も三十分近くあるので場内を探検するかこうでもしていないと間がもたない。

オーケストラはウィーンフィルを構成するメンバーであるが、手慣れた曲は三々五々集まってぶっつけ本番という感じなので一幕の最初はばらばらなこともあった。知人のメンバーの奴も「七時半開演の時には七時に家を出る」ということで妙に納得した。ただこれが超一流指揮者のムーティやメータが来ると話は別で、皆早くから来て必死で練習している。上からオーケストラピットを覗くのもなかなか楽しいものである。

もう一つウィーン・フォルクスオパーという昨年来日した有名な市民オペラ座がある。こちらはコミカルなオペレッタやミュージカル中心ですべてドイツ語で演じられる。これがまた非常に楽しい。その辺のおばちゃん達がめいっぱいおしゃれをして楽しみに来ている。国立歌劇場が芸術性、音楽性を重視しているのに対しこちらは徹底的に娯楽主義であり、お互いが競合しないようになっている。

（ピアニスト・高知大学助教授）

私の旅

西村　洋一

二十二歳の夏、私は交通事故を起こして頸椎を骨折し、首から下の機能が全く無くなり病舎のベットで来る日も来る日も天井を眺めているだけでした。

しかし、時折鏡に映して貰った景色で自然の移り変わりを僅かに感じるようになりました。

眠れなくて無限かと思う長い夜もやがて朝は必ず来てくれる。時という奥行の深さは、苦悩の日々を思い出として抱き込んでくれることを身をもって学ぶことが出来ました。頑張っていれば今日よりは明日、明日よりは明後日。この刹那は再びない、必ず道は開けるのだ、と少し動く兆しのみえだした両腕と共に、私の心にわが身を励ます気持ちが芽生えて来るようになりました。

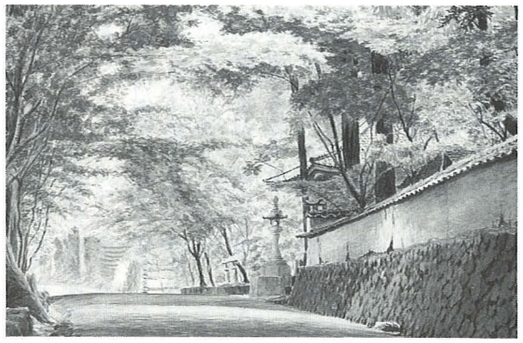
それから二年余りの後、両腕の屈伸力が多少戻り、準備をしてもらえば一人で食事ができ、乗せてもらえば車椅子で僅かな時間は動けるようになりました。

物事を少し前向きに考えられるようになったある日、一枚の絵に出合ったのです。それは小さな水彩画で、入院していた病院の近くに居る叔母が持って来てくれたものでした。

何気なく見た「浜辺の風景画」に私は凄い衝撃を受けました。それまで水彩画といえば小・中学校の印象しかなかったので、その絵の鮮烈な印象は今も忘れません。

真青い海に弾ける波、青く広い空に白い雲。それらの色合いがとても鮮やかで、言葉もなくただじっと見つめていました。

そして私もこんな絵が描けるようになってみたいと思いました。それが絵とのかかわりの始まりです。



「緑 陰」　1989.3

しかし、実際に描き始めてみると、手の感覚が全くないので筆がどんな感じでタッチされているか目で確かめながらの手法は、意志の半分も動かずやっとの思いで塗れても、とんでもない色合いになったりして、何回も駄目か駄目かとの思いが頭をよぎるのでした。でも自分にはこれしかないと思い、自分に合った方法で試行錯誤しながらこつこつと描き続けました。もともとマンガを描くのは好きで、いつか本格的に勉強したいと思ったときもあったので……。

そのうち、自分の思っているものに少し近い絵が描けて、こんな私にもやれることがある、やれば出来るのだという自覚と喜びが湧いてきました。

そして生きることの価値と素晴らしさを教えてもらった気がします。

ともすれば、自暴自棄や卑屈になりがちな気持ちを、絵たちはいつも支えてくれています。

あの時、あの一枚の絵との出合いがあったからこそとしみじみ思うのです。

あれから十七年余りがすぎ、今もなお感慨を新たにしています。

絵を描くことは一日のうちでせいぜい一時間程度のことですが、私の生活全体を充足させてくれています。このひとときは、一人で外出できない私が自由に行ける夢の空間への旅だと思います。

（梼原みどりの家）

西村さんは平成六年四月二十一日から六日間、高知市内ギャラリーパンにおいて第一回個展を開かれました。

一陣の風

―蓮田先生とのひととき―

岡本　玲

「玲さんは、先生とご一緒に文化勲章を受けられた、俳優の森繁久彌さんと親しくしているんですよ」

「ほおーっ」

「あの…。森繁先生は干魚がお好きで、家の海産物店とは二十年来の取り引きを頂いています。店の姉が何かとパーティーにお招き頂き、そのたびに家中で大騒ぎしています」

半日の観光を終え、龍馬の銅像を背に、一行はやっとベンチに腰を下ろしていた。

日展高知展とともに、われらが㈳現代工芸美術家協会の会長、蓮田修吾郎先生（鋳金・金属造型）が指導理事として、はるばる列車で鎌倉から来られた。

蓮田先生と

海の色がミスティブルーに変わり、水平線が白く光っている。

「森繁さんとは受章も一緒だったが、あの人も満州の引き揚げでね、……、苦労したんだよ」

「私も二十一年の満州生まれです。二十三年の引き揚げで、母は私を背中に、両手に荷物、それに四歳の姉の手を引いて……」

先生は、眼鏡の奥から覗くように、

「そうですか―。僕もその混乱期には奉天におりましてね、帰国直前にソ連軍に遭遇し、陛下から拝受の壊中時計で命を拾いました」

「母も、思い出の品を何一つ持ち帰れず、未だに残念がっています」などと、私は分かったような満州話を交わした。

後で、わが師石川充宏先生（高知大教授）に「あの人は幾つになるかね？」と尋ねられたという……。

昨年、上野・東京都美術館での日本現代工芸美術展の受賞者（金属工芸）ということで、初めて石川先生より、会長先生にご紹介を頂いた。

「この会場にも類型のものが残っているが、類型は駄目だ。君も石川君と同じものを造らないよう頑張りたまえ」

厳しい表情で会場を見渡しながらいわれた。先生との出会いの一言だった。

一陣の風が、浜の方から吹き上げて、潮の香りが清々しい。

「先生のご本『公共の空間へ』拝読しました」

「えっ、ア、そう――」

と、少し驚かれた様子。

一九八二年発行のその本は、金属造型を確立するまでの半生と、公共と芸術のかかわりという内容で、特に、当時の西ドイツとの文化交流に力を注がれたことが印象に残った。

先生の日本金属造型展には毎回、ドイツからの出品があり、ハンブルグの工芸博物館では、日独金属造型展が開かれ、石川先生も選抜で、数回出品された。

一昨年、こうした長年の交流が実り、日独共同企画で、現代工芸ドイツ巡回展「日本の新しい工芸」がフランクフルト工芸館で開催された。約百点、六カ月間の長期にわたる展示であった。

実直なドイツ国民が、この展覧会から何かを学ぼうとする、真剣で熱のこもった鑑賞ぶりだったという。

今、改めてドイツ各新聞の論評を読み返してみた。日本の現代工芸作品群を世界のレベルと視野でみたもので、これを残しただけでも、貴重な海外巡回展であったと思う。

日展が二十年振りに高知に巡回し、入場者五万六千二百八十二人（公式記録）の県民それぞれの批評や思いが、今後の高知の美術文化を培ってゆくことだろう。

会長先生は、全国を展示指導などで巡回され、高知だけが未踏の地であったとか。

その最後の地で、日展が開催されたことを大変お喜びであった。

夜は、地元の鰹のたたきや皿鉢の料理数に驚かれ「東京で、これだけ頂くと大変ですよ」と、あれこれと楽しまれた。

翌朝、テープカットを終えられた足で、松山に向かわれた。

「もう一度来たいと思うなあ」と、側近の方に相槌を求めながら…。

（㈳現代工芸美術家協会・会員）

私の生きた証

中村　茂美

この三月に初めての歌集『笹の花』を上梓致しました。短歌を始めて十一年、娘の結婚、透析、流産、そして私自身の再々婚、離婚、最初の夫との再会、健康上にも黄信号が出たこともあり一区切しておきたかったからです。

私が短歌にかかわりをもった動機は、別れた最初の夫に娘が逢ったことです。十年近く何も言わなかった娘が高校を卒業した春、別れた父に逢いたいと胸中を語りました。人を介して相手の意向を聞いてもらうと「逢う意志がない」という返事が届きました。（しかし、実際には娘の気持ちは相手に伝えられていなかったことが後で分かりましたが）母として手だてを尽くした後「時期をみて自分でお父さんの気持ちを確かめなさい」と言葉を添え、そして九州に住んでいるらしいことも告げておきました。しかし逢うこともあるまいと高を括っておりました。

奈良に住む娘が二十歳を過ぎた頃、父に逢ってきたことを言葉少なに電話で知らされた時、裏切られたという気持ちが強く、何とも寂しくショックでした。だれも居ない独りの家に奥歯を噛みしめて座りつづけました。涙が乾いた時「こんな気持ちを短い文章で日記に書きたい」これが動機でした。今から十五年程前のことです。

高知新聞社の「短歌教室」に二期通いましたが、なかなか作れません。その後、社会保険センターの趣味講座「文学と短歌」を受講しております。師は「恥を恐れず歌を詠め」と常に申され、私はこの言葉に勇気づけられ、下手でもともと、恥ずかしがっていては上達しないと、私生活を晒した拙い歌を人前に出し添削を受けました。師は勇気ある歌と励ましてくれました。

こつこつと十年余り詠み続けた短歌、四百首余が『笹の花』となりました。よくも赤裸々に詠んだものだと思っても、もうどうすることも出来ません。すでに私の手を離れ一人歩きをし、忌憚のない反響が届きはじめております。多くの方が一気に読み通したと書いて来ています。某図書館の職員は「その時の気持ちを詠みとめておくことの大切さが分かり、自分も短歌をまねてみたい」とも書いてくれました。お世辞にも上手とは言えない私の歌を読み、それでも短歌を始めてみようと思われる方がいた……、これは私にとってとてもうれしいことでした。

作歌を始めた頃には『石川啄木歌集』一冊だったのに、頂いたり買ったりしてボツボツ増え、そしてこの春には自分の歌集も並びました。これは私よりも確実に長生きをする、即ち私の生きた証となる筈です。

歌集上梓に当たっては短歌だけではなく、いろいろと学ぶことがありました。私の不勉強が原因ですが、「歌集さえ出さなければこんな思いもしなくて済んだのに」と沈んだ日もありました。しかし沢山の友達が出来ました。この方々は私の宝です。

私の経験を語りつつ「歌集を上梓してよかった!!」この気持ちを多くの友にも共有してもらう日を楽しみにしております。お互いに励まし合いながら歌を詠み続けたいと思います。今年は記念すべき年になりそうです。

人目には付かずともよし「笹の花」悔いを残さぬ己れの生きざま

いまさらに歌集に発かれしわれの生消すすべもなし愛しみゆかん

卒直に喜怒哀楽を詠みし歌集「一気に読みき」と友が書きくる

（南国短歌　雲珠短歌会）

中岡慎太郎館

―北川村―

国道55号線から奈半利町で向きを変え、奈半利川に沿って山間に約七キロ入った所が、幕末の志士中岡慎太郎の生誕地である北川村柏木地区。

中岡慎太郎館は昭和四十二年に復元された生家の直ぐ上方に建設されているが、建物は土佐の伝統的な土蔵をイメージした和風様式で、その白壁と山のみどりのコントラストも素晴らしい。

北川村は昭和六十三年に慎太郎生誕一五〇周年を迎えている。この記念の年を前に住民の中から、ややもすればその業績にかかわらず、龍馬の陰に隠れてきた慎太郎を表に出そうという運動が起こり、北川村をはじめ中芸五カ町村の青年・女性が中心となり「中岡慎太郎を表舞台に出す会」が結成され、記録映画制作とその資金集めの募金運動などが行われた。

これらはやがて地域住民全体のものに広がり、行政においても一五〇周年記念事業実行委員会が組織され、村民の慎太郎に対する思いは一気に高まったといえる。

その後、村では「ふるさと創生資金」の使い方について、住民アンケートを実施している。

この中で一番要望の多かった〝中岡慎太郎の歴史記念館建設〟を決定、今春四月十三日、慎太郎の生誕日に合わせ開館する運びとなった。

まず一階は、慎太郎の生涯を同時代人の目で見られるよう、年代ごとに時系列で史実に基づき、慎太郎やこれをとりまく人々、そして出来事を映像・パネル・資料を使ってドラマチックに紹介している。

映像は八カ所、延べ約一時間あり、そのおいたちから非業の死を遂げるまでの生涯が実に分かりやすい。

展示コーナーをタイトル別に挙げると、幕末タイムトンネル・幼少時代・田野学館時代・大庄屋見習い時代・土佐藩時代・草莽の志士時代・薩長連合工作時代・倒幕運動時代・近江屋事件など。

二階へは玄関正面の広い階段を上がる。ここは慎太郎の人間としての魅力は何かを考える展示で構成、パネルや映像、レプリカを使ってそのパーソナリティを脚・書・剣・論・友の五つの局面から表し、慎太郎の人となりが分かる。

例えば友のコーナーでは、慎太郎が国事のために生命をかけ奔走して培い、これによって薩長連合や三条・岩倉の連携をなし遂げることができたその幅広い人脈を知ることができる。

また、多目的ホールでは午前十一時からと午後二時からの二回、映画「幕末に生きる中岡慎太郎」の上映が行われている。

この外、慎太郎にまつわるものとして、脱藩前まで使っていた茶碗・硯箱・裃などが保存されており、これらを見ていると慎太郎をより身近に感じてくる。

館の周辺に目を移すと、近くには幼少のころ読み・書き・書を学んだ禅寺松林寺跡（明治に入り香火により焼失、山門のみ現存）があり、境内には妻兼とねむる遺髪墓地が、また上流ハモド地区には、大庄屋見習い時代に耕地整理をしたと言われる五ヘクタールの水田が広がる。

開館後二カ月を経過、現在でも日曜日には四百人近い入場者があり、いま慎太郎が注目されている。

（編集部）

第10回高知の映像コンテスト入賞作品

高知を撮る

昼休み　国澤　秀穂

庭訓

風俗歳時記

庭訓（ていきん）というのは家庭教育のことである。親は誰でもわが子の幸福をねがっている。生き甲斐はと問われて、〈家族〉と答え〈子どもの成長〉を挙げる人は多い。

では子どもにどんな生活をしてもらいたいかと問えば、別にたいそう出世を望んでいるのではなく、有名人になれと言っているのでもない。あるいはまたすごく金持ちになることを夢みているのでもない。だがこれはたてまえと本音のちがいで、本心はそれに近いものを望んでいるのだろう。

だからわが子が、ありのままであることを許そうとしない。よその子であれば、特別気にならないことがたまらなく気になるのである。「どうしてこんな簡単なテストがわからないの?」「スポーツばかりやっていて、どうしてもう少し勉強してくれないの?」と、ひたすらはっぱをかけようとする。それが親の愛だという。

戦後約半世紀、激しい社会変化によって子どもをとりまく環境は大きく変わった。工業化、都市化、過疎化、核家族化、高齢化、情報化、少子化などは、そのまま子どもの生活環境、教育環境への変化の要因と考えていい。そしてこれらの環境の変化は、子どもの時代の経験を大きく様変わりさせた。

人は子どもの時代の環境や経験を「原風景」「原体験」として、その性格構造の奥深いところに温存する。人間は動物として生まれ、人間として育つものである。狼に育てられた子どもの例でもわかるように、人間に育つためには、人間らしい生活と教育、交流があってのことである。

人間であることの教育は、乳児から幼児期にかけて、家庭で基礎、原型がつくられている。それをまず家族から学び身につけていく。こうした庭訓こそ重要ではないか。

（晋）

「緑青会」

四季折々を日本画に

藤村　隆

「緑青会」は日本画を学習しているグループです。高知市立中央公民館主催の市民学校日本画教室のOBが、もっと勉強を続けたいということで、県展日本画無鑑査山本卓子先生を講師に、昭和五十二年十一月に発足しました。

現在、会員は三十名。ほとんどが気が若い女性で、熱気ムンムン。数少ない男性は圧倒されっぱなしです。

研究会（学習）は月三回、原則として第一・二・三の土曜日の午後二時～四時まで、中央公民館で行っています。四季折々の花や果物などを色紙に描き、「なかなかえいやいか」と先生に褒められて、喜んだり、「困ったちや、どうしよう」と悩んだりして、週一度の緊張のひとときを過ごしています。また、ベテランの方は岩絵具（いわえのぐ）を使って、大きな作品にも挑戦しています。初心者は初心者なりに、ベテランはベテランなりに、それぞれの内容を高め、作品の向上を目指して頑張っています。

年に一度、一年間の研究成果を発表する作品展も開催しています。小品から大作まで、それぞれが一生懸命に描いた作品を家族や友達がきて褒めちぎってくれ、芸術家気分に浸っています。今年は十七回を迎え、九月二十七日㈫～十月二日㈰に、中央公民館で開催する予定です。

「教師なし先輩あり、教習なし研究あり」をモットーに、日々研鑽に励んでいます。

連絡先　香美郡野市町父養寺九四
電　話　〇八八七五－六－一七三二

「女声コーラスどれみふぁ」

あじさいの花の如くいつまでも

住友カヨリ

あじさいの花は一つひとつの花びらが沢山集まってあんなにきれいに咲くのです。

そうです。私達のコーラスも、一人ひとりがみんなにあたたかく包まれきれいな曲の花が咲くのです。

先生、この記号はどう言う意味？一枚の花びらから素朴な質問がポッカリと、その声でまわりのみんなもこと新しく耳を寄せます。何故ならば、いざ教室へ入るともう親しい家族にかわるのです。

指揮の先生は今をときめく声楽・オペラ・合唱と大活躍の若きリーダー川田弘人先生なのです。さてその指導ぶりは先ず素晴らしく機知に富み、物真似と例えがうまく、ユーモアの中で自然に気付かせ、理屈ぬきに表現させる指導の魔術師とでも言いますか、その一言が笑いにまきこみ無意識のうちに癖がなおってしまいます。

今までも数々のコンサートに出演し、その成績はかなりの実力を発揮しました。

歌が好き歌うことが好きと言う方は勿論、嫌いでもこれから少し歌ってみようかと思われる方はきっといると思われます。

目まぐるしい今の社会で、思い切り歌にリズムに、夜空に輝くオーロラの如く喉という筆で心に自由な絵を描いてみませんか。

美しいあじさいの花の絵を。

練習日　毎週火曜日夜七時三十分より
連絡先　高知市上町三丁目八－一〇
電　話　〇八八八－七五－五七〇〇

「能茶山の土と遊ぶグループ」

つぎつぎと輪が広がって

土居　節子

平成二年二月、友達と「焼き物を作ってみたいね」という話から、「さあ、場所と焼いてくれる所がないかなあ」と尾土焼の谷製陶所に相談をしたところ、場所も提供して下さるうえ、焼いてもくれるという話になり始まったものです。

スタートは数人でしたが、そのうち友から友へと伝わって、平成五年初めには三十人位になり、作品もまあまあの物が出来るようになったので、一度発表会をと話がまとまり、二月には北本町の中央郵便局のロビーで五日間発表会を開きました。

なかなかの評判で、たくさんの方にみていただきうれしくなりました。そこで発表会も年に一度くらいは続けてみようと、今年も早速二月にヨンデンプラザで七日間の開催になりました。

中にはぜひ譲って欲しいという方もあったりで、前回より少しは自信もつきました。

素焼きに絵をかく難しさも知らされ、水墨画の勉強も始めたりしています。

最近では人数も増えて四十数人、中には遠く窪川からかけつけてくる仲間もいます。

勉強は週一回ですが、近々県外の窯の見学もしてみようという話も持ちあがっています。

早くもつぎの発表会が待ちどおしいこの頃です。

連絡先　高知市鴨部一三五六
電　話　〇八八八－四四－四五四七

「初月小学校ＰＴＡ美術クラブ」

子どもたちの活躍に刺激され

吉井　眞智

昭和四十四年、初月小学校のたくさんの子供たちが各種美術展に入賞したことに刺激され、この年、ＰＴＡ美術クラブとして発足しました。以来、田上先生、高尾先生、中城先生と指導を受け継いでいただき、現在に至っています。四十五年の「第一回おかあさんの美術展」に始まり、今年は去る三月八日から十三日まで高知市立中央公民館で「第二十三回おかあさんの美術展」を開き、一年間の成果を、初月小ＰＴＡの方々や、広く市民一般の方々に見ていただきました。みなさんの寸評や励ましの声が私たちの励みとなっています。

現在、部員は九名。新年度には学校で入部募集を行い、新人の方が入ってきます。油絵具初めて、油絵筆初めてという新人です。でも県展無鑑査の中城克巳先生のやさしく分かりやすい指導のもとに、ベテランから新人まで「ここはこうしたら」などとアドバイスをしたり受けたりしながら、和気謁謁と楽しんでやっています。一年間の活動は、制作の合間をぬって、写生会、美術館めぐり、折々の食事会などです。一年間のしめくくりは、「おかあさんの美術展」です。絵が好きな方、自分でも描いてみたいと思っていらっしゃる方、ご一緒に楽しみませんか。是非ご一報下さい。

教室は、初月小学校美術室

毎月、第一・三土曜日の午後二時から四時までです。

連絡先　高知市万々五六　川村美恵
電　話　〇八八八－七三－九一二四

散歩の途中で

高知西トンネル、延長635メール。
高知西バイパス（高知市鴨部～伊野町波川）のうち、高知市朝倉米田から伊野町枝川をつなぐ。

枝川側では四国横断自動車道が交差し、やがて交通体系も一変、人々の生活はいま大きく変わろうとしている。高知西トンネル、平成８年度供用予定。

風伯

在野の発想

土讃線の走る四国山中のある町の話である。そこで詩を書き続けてきた人が、二十年ほど前、町に対してひとつの提言をした。マンガ館を建てようじゃないか。資料が集まれば全国から人もやってくる。町の活性化にもつながると呼びかけた。

だが提言は無視された。変わった男の思いつきということで笑殺された。その人はマンガは確実に時代をとらえている、伸びていく、いま捨てられているものを集めておけば、やがては大変な町の財産になると説いたらしい。だが分かってくれる人が町にはいなかった。いや気もさして提言するのをやめたとのことだった。

いまマンガは盛況である。高知でもマンガ甲子園が毎年開かれ、マンガ館をという話もあちこちで出ている。古書目録にもマンガが出ており、年月のたつものはずい分と高値で入手のむつかしいものも多い。ほとんどが二十年前は捨てられていたものだ。四国山中の町の提言者が予測したとおりになってきている。

この提言を、もし二十年前に町がとりあげ検討して着手していたら、四国山中のこの町は、いまごろマンガ愛好の若者たちの巡礼地として全国に名の知れたユニークな町になっていたのではないか。先日、しずみがちのこの町を通りながらふと思った。

在野の人の発想には、ときとして、とっぴょうしもないように見えるものも多い。だが行政とは違った眼で時代を先取りしていくものも多いのではないか。（睦）

―――― 高知の映像コンテスト10周年記念 ――――

写真展・高知の風景

10年間にわたり高知の映像コンテストとして、広く公募した写真の中から、特選作品を中心に高知らしい風景、出来事を集めました。
すでに無くなってしまった風景、懐かしい出来事など、たくさんの方々の撮影による様々な高知の風景をお楽しみください。

と　き：1994. 7. 28.(木)～8. 2.(火)　AM 10：00～PM 6：00
ところ：市民フロア(はりまや橋・デンテツターミナルビル 5階)
入場無料

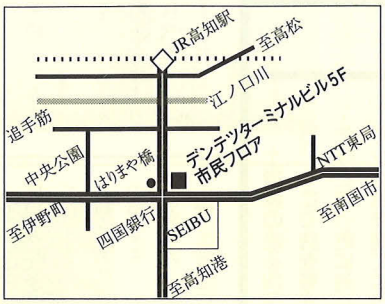
主　催：(財)高知市文化振興事業団

市民フロアのご利用を

展示や会議に最適！

広さ・内装　96㎡壁面布クロス張り、スポットライト完備

所在地　高知市はりまや町一―五―一・デンテツターミナルビル5階



申し込み　(財)高知市文化振興事業団
☎73―4365

賛助会員募集中!!

会　費	年額　2,000円
特　典	①　機関紙「文化高知」を年6回お手元にお届けします。
	②　事業団発行の出版物の10％割引（一部例外あり）
	③　主催事業や刊行物の案内(マスコミ利用の場合あり)
	〔※上記特典は申し込みいただいた日から1ヵ年有効〕
お申し込み	①郵便振替　②現金書留　③直接事業団へ…
	いずれの方法でもけっこうです。

財団法人 高知市文化振興事業団　〒780 高知市本町5丁目2番3号　TEL (0888) 73－4365
郵便振替 01680-5-14869
(平成6年5月から変更になりました)